

《エッセイ》

法学部の思い出

——小林孝輔先生を偲んで——

宮 本 栄 三

はじめに

わたくしは、一九九五年に宇都宮大学を定年退職し、それから七年間、国士館大学法学部・同大学院に勤め、皆さんにたいへんお世話になった。わたくしがこの大学に赴任するようになったのは、青山学院大学名誉教授、国士館大学大学院客員教授をして居られた小林孝輔先生とのご縁である。九四年の秋頃、先生から電話あり、法学部に大学院を設けることになったので、わたくしに憲法担当者として来るようにという話であった。この話を聞いたとき、「国士館」は右翼のこわい学校という思いがわたくしの頭をよぎった。直ぐにそのことを話すと、「なにを馬鹿なことを言う、俺が知っているんだよ」と叱られた。着任して判ったのはこの「こわい学校」というのは全くの虚像だったということ。そういうイメージは、教職員、学生との交流のなかでいつの間にかすっかり消えてなくなった。人とひととの自然な交わりの大切さをしみじみと思う。そして小林孝輔先生との永年のご縁がなければ、国士館大学法学部とのご縁もあり得なかったであろうと、ご縁というものの不思議さを思うのである。

法学部の思い出（宮本栄三）

一九九

人の一生というのは、まるで経糸（たていと）と緯糸（よこいと）の組合わせによって織りあげられる一枚の「布」である。もちろん糸の素材や太さや色合いによってそれぞれ違った織物になるが、経糸と緯糸の交織がなければ織物にはならない。人の一生はいろいろな糸の出会いでつくられる織物である。近年は不織布という布もあるが、わたくしがここで人生に例える「布」とは、少年時代、村の婆ちゃんが日がな一日、がっちゃんこ、がっちゃんこと手織りしていた織物のことである。時のながれの中で紡ぎ合わされ織りあげられる織物こそ、人生の縮図のように思えてならない。出会いは実に不思議である。出会いがあればまた別離もやってくる。わたくしも多くの出会いと別離を経験した。なかでも専門の憲法学の分野でいうと大きな影響を受けた三人の先生を挙げねばならない。田畑 忍先生（同志社大学学長）、黒田了一先生（大阪市立大学教授・大阪府知事）そして小林孝輔先生である。お三人ともいまはこの世に居られない。なかでも小林孝輔先生は一昨年十一月に急逝された。今ここで紙面をお借りし、小林先生を偲び、先生とのご縁を記しておきたい。

（一）

わたくしが小林先生のお名前を知ったのは、まだ大学院の学生時代で、先生の最初の著書「社会科学としての憲法学（一九五四年、森北出版）」によってであった。当時の憲法学はまだ概念法学的な解釈法学中心のものであった。先生はそのような古い憲法学に異を唱え、歴史のなかで動く憲法現象を社会科学として把握する必要性を強調されたのである。わたくしはこの本を読んで目が醒める思いをした。そして修士論文のテーマと内容をこの本から着想して書いた。もう五〇年も前のことである。当時、先生は日本公法学会の理事であり、学会で輝いておられた。わたくし

には遠く高い存在であった。先生のお話を身近で聞いたのは、京都で、田畑先生の憲法研究所主催の講演会のときである。六〇年安保の後であった。先生は、明治・帝国憲法の時代と戦後の日本国憲法の時代を比較して、立憲主義の確立の必要とそのために護憲（憲法を護っていく）活動の重要性を強調された。質問に対するお答えがなんとモラースで楽しいものであったことを忘れない。それ以来、わたくしは聴講者のひとりとして先生に覚えていただいた。その後、個人的にいろいろお世話になった。恥ずかしながら先ずお金のことである。香川県善通寺市にある四国学院大学に職を得たばかりのとき、青山学院大学で催された日本公法学会に出席し、三日ぐらいして帰るとき切符を買う金が足りなくなったのである。これにはまったく困った。小林先生にお話して切符代の一部を貸していただいた。これが縁で先生との文通が始まった。その後、学会でお会いすると「よう、元気にやっているか」とお声をかけて下さった。それから著書をたくさん頂いた。「本を出さない学者というのは、走らない自動車のようなものだよ」と、こちらの耳にちょっと痛いことを言われた先生は、本当に長距離・高速走行車のように沢山の本を出版された。ここでいちいち紹介はできない。またその必要もない。そこでこの十年の間に出版された本の中から先生の学風のよく判る本を二点だけ挙げてみよう。ひとつは「戦後憲法政治の軌跡」（勁草書房・一九九五年）、もう一つは「戦後憲政年代記（上・中・下）」（信山社・一九九六年）がある。これらの本は、憲法の基本原理に照らして、それに反する現実政治の動きを鋭い批判を交えて考察したものである。例えば前者の「軌跡」のはしがきの中で「戦後の五十年は……平和に抗して軍備を法認するための改憲論や過去の歴史に反省なき大國論が、政、財、官に根強い」とされ、「戦後の五十年は、このような憲法原理の「変化」と政、財、官による「妨害」との絶え間ない闘争の歴史でもあった」と記しておられる。そして後者の「年代記」三巻は、このような政、財、官の動きに対する、先生の四十五年にわたる批判の言論活動（雑誌、新聞、各種機関誌への投稿、講演の原稿など）を収録したものである。国民主権と人権尊重

主義、なかなしく平和主義の憲法原理を破壊しようとする動きへの激しい怒りが息づいている本である。未収録のその後十年分の原稿もたくさんあるだろう。いま二〇〇六年、改憲論の喧しい現在、もし先生がご存命であればもっとも厳しい批判の本を書かれたことであろう。

(11)

こうした憲法学者としての研究と言論活動をつづけてこられた先生は、他方、自ら「風外子」と称する達意の文章家であり、また能筆家であられた。随筆集「風の外―本と人と酒と―」（一九八二年・学陽書房）、「風吹けど」（一九八八年・泉書房）、「風やまず」（一九九九年・龍星出版）の三冊の随筆集を出しておられる。書名どおり「本と人と酒」を中心にした楽しく瀟洒でしかも人生の要を穿った随筆集である。なぜ雅号が「風外子」なのか。先生自身が書いておられる。実家が禅寺でよく句会が開かれた。中学生のころ自分も発句をし、俳号を欲しくなった。当時、坪田譲治の「風の中の子供」という童話が評判だった。「わたしは風の中は寒くて恐ろしくていやだ・風の外がいい、というところから「風の外の子」風外子ときめた。しかし三字では多すぎるので色紙に署名するようなとき「風外」とサインした。森鷗外の雅号に惹かれていることもある。」こういういわく・いんねんを語っておられるが、わたくしの読むところ、とくに文中の次の点が大事であろうと思う。「外にいるということは客観的観察に便利だし、客観的ということは価値にとらわれないということだ。価値にとらわれないことは正確な判断、評価の絶対要件である。そしてそれが学者の任務である」（「風の外」一六〇頁）。そしてさらに次のように言っておられる。「歳末は求めずとも来たるのが人生ではあるまいか。そこだけ覚悟しておけば、風の外の子であることを恥ずることも、辞することもあ

るまいと思う。むしろ叶うことなら、終生風の外にありたいと願う。……こんなわけで、風外子という雅号は、たいへん気に入っているのである。」このように言われる小林先生は、社会科学家としての目をもつ随筆家「風外子」をして人生を語らしめているのである。これらの本の中で時局の話、酒の話、ワインのこと、美人論も楽しく語っておられる。そして「風の外の子」であることを願われた先生であったが、「風吹けど」、「風やまず」の現実を慨嘆もしておられる。この三冊の本の巻末に人名索引が付いている。その多種・多様また多数におどろく。各巻二百数十人の名前があがっている。先生の読書録であり交友録でもある。

信州・穂高のアルプスの山麓に学者村という赤松や白樺やぶなの木の茂った別荘地がある。その一角に「風外荘」という小林先生の山荘があるのだ。この風外荘の看板が先生の書である。ここに招待された人は多かるう。わたくしも数年前の夏、お招きを受け家内と共に訪問した。先生ご夫妻で待っていて下さった。そして安曇野周辺の名所旧跡、美術館、窯元、造り酒屋、ワイン醸造所、わさび田などを案内して下さい、いろいろ教えて頂いた。このとき、わたくしが先生に教えたことがひとつだけある。それは山荘の入り口の赤松の木を切り倒す方法だ。入り口にある高さ十五メートルほどの赤松が枯れて、放置しておく危険だ、切り倒したい。しかし家屋を壊すたいへんだ。道路に沿って安全に切り倒すにはどうすればよいかという質問である。わたくしは答えた。まず、木を切り倒したい方向に三角形の頂点がいくように考える。そして木の中に、鋸の切れ目で、三角形の底辺ができるように切れ目を入れる。この頂点と底辺のつくる「三角形」がだいじである。だいたい木の太さの四分の一ぐらいの切れ目（底辺）を入れる。次に、そのやや上から底辺の切れ目に向けて切るとそこに三角形の空間ができる。この空間が木が倒れるときものをいうのだ。専門の木こりは大きな斧でこの空間をつくる。最後に、反対側から「三角形」の底辺に並行して切っていると、木は、底辺部に支えられながら、自然に切り倒したい方向（頂点）に向かって倒れる、と答えた。しかしちよ

っと危険だから、わたくしが明日切ってあげましょう、と言っておいた。ところが翌朝おどろいた。わたくしが言ったとうりに見事に切り倒してあったのだ。わたくしが感心すると、先生は、憲法研究者が木の切り倒しかたを知っているとは驚いたので、さっそく実験したというのだ。わたくしにすれば、戦争中、勤労奉仕をさせられ、木を切り倒したときの経験にすぎなかったのである。何ごとにも好奇心とやる気の旺盛な先生であった。

(三)

まことに小林先生の思い出は尽きない。先生は人との交わりを大切にする友誼の人であった。先生が親しくされた人は、恩師、知己、友人、研究者、元学生などたいへんな数になるだろう。戦後、復員して間もなく神田の本屋街で恩師・有倉遼吉先生とたまたま出会い、「どうしているか」と聞かれ、これが縁で、その後、早稲田大学大学院の有倉研究室でドイツ憲法の勉強を始めたとのこと。鈴木安蔵先生との出会いも大きな意味をもっている。小林先生が「社会科学としての憲法学」を著したのは、鈴木先生が戦前からそのような憲法学の研究をつづけてこられた影響があろう。それから先述の田畑 忍先生との出会いである。この三人の先生方との出会いのいきさつを小林先生は敬意と感謝を込めてしばしば語られた。それからもうひとり旧友の岡山大学名誉教授・上野裕久先生とのことであるが、それは並みのものではなかった。上野教授が、畢生の大著「わが国市町村議会の起源」（信山社・一九九八年）の四千枚の原稿を残して亡くなった。こんな歌が残されていた。「出版社に原稿送りホッとする三十五年の研究のまとめ」「元氣出さねばまだ校正が残りいるそれまではどうでも生きねばならぬ」「この本の顔を見るまでは生きていたし心臓という病を抱へ」。この話を聞いた先生は、「なんとかならんか」と、わたくしや元山 健龍谷大学法学部教授に相

談され、憲法研究所の上田勝美・龍谷大学名誉教授など十二人のメンバーによる校正作業の采配を振るわれたのである。一年余りの校正作業の後、この大著が完成し出版された。しかも先生は、この本の最後の「補記」で「徳は孤ならず必ず隣有り」という言葉を旧友のために贈られた。亡くなった旧友のため最善を尽くされたのである。

このように友誼に篤い先生であればこそ、日本IBMからたつての依頼を受け、茶室の命名とその額の揮毫をされたのである。茶室名は「比隣亭」という。その謂われは、初唐の四傑の筆頭にあげられる詩人・王勃の詩である。「海内存知己 天涯若比隣」（カイドイ知己ヲ存スレバ テンガイ比隣ノゴトシ）。その意味は、「この広い世の中に自分を本当に理解してくれる友が居る限り、たとえ空の涯に身を置こうとも隣り合わせに住んでいるようなもの、即ちお互いの気持ちはなんの隔てもなく通い合うものである」とされている。

最後に忘れ得ない悲しい突然のできごとがあった。一昨年（二〇〇四年）の十一月十八日（木）の午後三時ごろ、とつぜん先生から電話がかかってきた。「元氣か。」「はい元氣です。」「そうか、それはよかった。こんど東京に来たら寄ってくれよ。いっぱい飲もうや。」「はい、そうしましょう。」「只これだけの会話であった。わたくしはここ数年、大きな病気をし、杖をつきながら大学に通い、三年前、最終講義を小林先生と一緒にさせていただいて退職した。それから一年余り、わたくしの健康を心配され、電話して下さったのだと感謝した。そして翌々日の新聞の訃報欄をなにげなく見て驚いた。小林孝輔先生のご訃報である。わたくしは直ぐに先生宅へ電話した。奥さまが出てくださり、昨日（十九日）の午前五時に急に倒れ亡くなられたという。前の日の電話のことをお伝えすると、「それがたぶん最後の電話だったのでしょう。他にも二、三の方に電話していたようです」と仰った。先生は織物の糸がぷつりと切れるように逝って仕舞われた。わたくしにとっては余りにも突然のお別れであった。後で奥さまから伺った話によると、先生は享年八十二歳、亡くなる八日前の十一月十一日の誕生日に渋谷で旧知・旧友の方がたから盛大なお祝い

パーティーをして貰ったとのこと。先生にしてみれば満足して逝かれたに違いない。

昨年の十二月十九日、おおぜいの人が青山学院に集まり、先生を「偲ぶ会」が催された。国士館大学法学部からも沢山の人が出席した。その席で高嶋平蔵・早稲田大学名誉教授が、小林先生の履歴や業績を紹介された後で、学生時代から永年の友人として見た先生のお人柄を細やかに話された。人びとは、小林先生の学者としての厳格な側面と同時に随筆を楽しむ、書をたしなむ趣味人としての側面を改めて偲んだのである。また奥さまの話では、庭にある先生手植えの柿の木をだいにされ、毎年、知人、友人に柿の実を贈られ、高いところの実は鳥たちへのプレゼントであったという。家を新築されるときもこの柿の木に優先権を与えられたという話は、聞く者の心をうった。

おわりに

ここでお仕舞いにするのはなんだか小林先生流の遣り方ではないように思われるので、もうちょっと楽しい思い出を付け加えて置く。先生は随筆や書道の並はずれの才能をお持ちであったが、他にもうひとつ人を笑わせる特技があった。手品である。もう二十年ほど前、憲法理論研究会の夏の合宿のとき、先生も参加され、夜の懇親会のとき披露された。皆、夢中になって見ていた。ドイツ旅行中、ホテルでこれをやるとホテルの支配人や同宿の連中が皆おどろいたという巧みな口上付きだったので、みんなすっかり手品のその手にのせられてしまった。十年前、わたくしが法学部に勤務して再見の機会を得た。いや再見どころかその後七年間、毎年、最終教授会後の懇親会でこの手品を見ることになったのである。毎年、新しいネタを仕入れた手品の披露なのだが、なにしろ新しいものだけに失敗も多い。失敗を予告しての失敗がまた爆笑を呼んだ。これが法学部の名物手品となった。これを見ないと法学部の年間行事が

終わりにならなかったのである。

さてこれで「法学部の思い出」の終わりとする。この十年の間に法学部は大きな発展をした。大学院は博士課程まで完成した。わたくしが来たとき十号館はまだ改修前で研究室は相部屋だった。一階の図書館も古びたものだった。いまは立派な六階建ての図書館ができた。正面玄関うえの最上階の壁面に「真理は不滅である」(VERITAS NUNQUAM PERIT)とラテン語で書かれている。三年前、わたくしは壁面のこの文字を見ながら国士館を後にした。